

第2節 遺物

1. 板塀瓦について

板塀瓦は通常の建物の瓦葺きなどでは使用せず、塀の屋根や住宅の霧除け庇、土蔵の窓庇など限定された部分に使用される瓦である。土浦城跡に板塀瓦が存在することは、88年の土浦城跡の発掘調査でも確認されており、今回の調査目的の1つである塀資料の収集という観点から見れば、板塀瓦は非常に重要な資料といえることができる。そこで今回確認された出土品から得られた新たな情報などをもとに、土浦城跡の板塀瓦について考えてみたい。

板塀瓦の基本形は、平板的な平瓦部と棧部から構成されているシンプルなものである。現在見られるものは、このほかに平瓦部に「水返し」と呼ばれる棒状の突出部が存在し、棧部との隙間を埋める事によって雨仕舞いに対応しているが、土浦城の出土品にはこの水返しが存在しない。推定ではあるが、土浦城跡の板塀瓦は水返しが設けられる以前の古い形態を示しているものと考えられる。大きさについては88年出土のものが38.7×32.2cm、今回出土した中で最も状態の良い(86)が35.1〔現存値〕×31.5cmで、概ね大差ないことがわかる。『図鑑瓦屋根』によれば板塀瓦の大きさは、長さは30.0(1尺)・36.0(1尺2寸)・39.0(1尺3寸)・45.0(1尺5寸)cm、幅が24.0(8寸)・27.0(9寸)cmとされており、土浦城跡のものは長さ1尺2寸に該当するものと考えられるが、幅はやや広く、1尺または1尺1寸に相当すると思われる。これ以外の基本的な形態的特徴としては、共通なものとして頭部近くの平瓦部に2ヶ所の釘穴があることや、平瓦や棧瓦に比べ瓦厚が厚いことなどが挙げられる。そのほかには一部前節の3にも示したが、

- ①右棧・左棧どちらも存在する。
- ②裏面に桁固定用の台形の突出部があるもの〔(106)など〕がある。
- ③釘穴が斜めに穿孔されているもの(102)や、瓦が反りを持つもの(98)もある。
- ④棧部と重なる平瓦部にV字形の水切り溝が設けられているもの〔(93)など〕と、存在しないもの(86)がある。

などを確認することができる。また製作上の共通特徴としては、棧部と平瓦部の接合部に喰い付きを良くする為に粗い櫛目による調整が行われていることが挙げられる。

これらの特徴とは別に、基本は同じであるが形状に特徴的な差異が確認されるのが角棧部の断面形状である。観察してみると(A)棧部の上面の角部がややなだらかな曲面を持つもの〔(79)など〕と(B)四角く角張っているもの〔(86)など〕の2種類が存在することが判る。上記の特徴についてこの分類を元に再確認してみると、(A)の曲面タイプの瓦には裏面の突出部やV字形の水切り溝が存在していることが確認できる。それに対し(B)の角張るタイプの瓦については遺存状態の良いものが少ないため判断は難しいが、少なくとも(86)については裏面の突出部やV字形の水切り溝の存在を確認できない。

他にこの瓦を分類するための特徴となりそうなものに胎土の違いがある。胎土については比較的砂質のもの〔(80)など〕と、粘土を中心とし、やや生焼け気味で粉っぽく感じられるもの〔(79)など〕、その中間的形質を持つもの〔(83)など〕、そして緻密で焼成も良好なもの〔(86)など〕が存在していることがわかる。先ほどの棧部形状による分類をこの胎土についても合わせてみると、(A)タイ

プには砂質・粘土質・中間質の3種類が、(B)タイプには緻密なものが使用されており、胎土の面からも同様の区別が可能である。

ところで、このように瓦の形状や胎土が異なる理由としては、製作された場所（生産地）が異なるか、あるいは生産された時期（年代）が異なることが考えられる。ただし板塀瓦の場合は、軒丸瓦や軒平瓦の瓦当面のような年代判別・産地傾向などが観察できる特徴的な部位が存在しないため、これらの判断は非常に難しい。そこでまず産地の問題についての資料を得るためにパリノ・サーヴェイ（株）に依頼し、理化学的な胎土分析による検討を実施した。資料は（B）タイプのサンプルとして（86）を、（A）—粘土質タイプのサンプルとして（96）を用い、分析を実施した結果、この2種類の瓦については細かな成分組成は異なるものの、どちらも土浦城跡周辺の地質学的背景とは調和していることが分かったため、断定はできないものの生産地についてはどちらも土浦近郊である可能性が想定された。分析の詳細は第7章4を参照されたい。

次に年代であるが、手がかりとなりそうなものとして（86）で確認された『前澤』刻印がある。この刻印は平瓦などでも確認されているが、この前澤氏は江戸後期に藩より「瓦師」を拝命した（註8）家で、明治期以降も瓦商を営んでいたことが史料や記録に残されている。古写真から塀は1884（明治17）年の東櫓焼失以前に破却されていたことが確認されるため、瓦の年代がこれより新しくなることはないと考えられることから、『前澤』瓦については概ね江戸後期～幕末頃の年代を示すものと考えられる。

ところで、この板塀瓦の使用が確認されている城郭としては、現存建物では長野県小諸城、滋賀県彦根城、京都府二条城などが、出土が確認されている城跡としては栃木県壬生城跡、埼玉県忍城跡、愛知県挙母城跡などがある。これらで使用されている板塀瓦を今回の分類と照し合わせて見ると、（A）タイプは挙母城跡、（B）タイプは小諸城、壬生城跡（註9）、忍城跡などと形態が類似している。よく見るとこのうち壬生城跡、忍城跡出土瓦には土浦城跡出土のものと同様のV字形の水切り溝が確認でき、また小諸城使用瓦にはこれらの中で唯一水返しが存在している（註10）。これらの瓦については壬生城跡出土瓦が17世紀前半から1870（明治3）年以前、忍城跡は18世紀頃（註11）、挙母城跡は1785（天明5）～1870（明治3）年（註12）のものと考えられており、概ね18～19世紀の資料として捉えられるものが多い。土浦城跡出土板塀瓦は文献史料から見た場合17世紀半ばまで遡る可能性が想定されるが、前述の通り（B）タイプの『前澤』瓦は19世紀頃のものとは推定される他は形態的特徴にも乏しく、現状で瓦の年代を推定することは難しい。消去法で見れば、残された（A）タイプの瓦のどれかは当初の瓦である可能性があると推定される。

今後の調査研究の方向としては、これら板塀瓦の分類の再検討をはじめ、その他の瓦を含めた製作年代や産地の特定を進める必要がある。今回板塀瓦の比較資料として、土浦城跡以外で出土例が確認されていない中心飾りが三葉文の瓦についても胎土分析を実施したところ、予想とは異なり土浦城跡周辺の地質には確認されていない結晶片岩が含まれていることが明らかとなった。この瓦は現在土浦城跡で確認されている軒平瓦の中では最も古式と考えられているもので、比較的出土量も多く近世土浦城の初期の施設整備にまとめて使用されたと思われる瓦である。このことから、江戸前期に行われた土浦城の施設整備に使用された瓦については、地元生産ではなく搬入品である可能性が新たに想定されることとなった。それに対し板塀瓦はいわば地元の粘土を使用した地元生産の瓦であると推定さ

れるが、文献史料から見た場合、塀が瓦葺きに改修された年代と三葉文系軒平瓦を使用している建物の年代（註13）はほとんど変わらず、近世土浦城に伴う瓦の生産と流通に新たな疑問が提起されることとなった。もちろん板塀瓦のすべてを分析したわけではないので、今回分析を行わなかった資料の中に三葉文系軒平瓦と同じ組成を持つ「古い」板塀瓦が存在する可能性もある。今後の研究の課題としたい。

追記

今回出土した軒平瓦（18）は江戸遺跡で確認されている加藤氏分類のⅠA a類と推定される資料である。ⅠA a類の瓦は加賀藩本郷邸跡出土例などから1650～1670年頃のものと考えられており、今回の三葉文系軒平瓦と同じく江戸前期の瓦の流通を示す資料として非常に重要である。

2. かわらけについて

今回の発掘調査では、土塁やその下の土層より比較的まとまった数のかわらけが出土している。これらのかわらけについては各層位ごとの帰属は比較的明確であることから相対的な先後関係については判断しやすいが、各層位ともかわらけ以外の遺物に乏しく、特に陶磁器などの年代判定の基礎になるような資料がほとんど共伴していないので、今回の出土資料から年代を判定することは難しい。そこで、今までの土浦城跡の出土資料や周辺遺跡の出土資料などから、今回出土したかわらけの位置付けを考えてみたい。

まず今回出土した一群の基本的特徴としては、体部がロクロ成形で底部が回転糸切り無調整、体部は直線的ではあるが軽い稜を持ちやや内湾する器形であることが共通している。なお、このような基本形態は下総から常陸南部で確認されるかわらけとは共通する特徴と考えられる。大きさについては、口径からは概ね大（約10cm超）、中（約8～9cm）、小（約7cm弱）の3グループに大別できるが、ただし大に該当する資料は少なく分布の中心は中と小である。底径については概ね4～5cm前後のものが多く、形状については各層位ごとのあまり大きな変化は見られないが、下層の第Ⅰ期層出土資料より上層の第Ⅴ期層出土資料に向かって体部の直線化及び口縁部の肥厚傾向が増す方向へ進んでいるものと考えられる。なお、亀城のシイ表採資料（第49図-52・53）は他の資料に比べるとやや口径対底径の比率が大きい。また葺石面出土資料（第45図-2）は逆に比率が小さく、形態も他のものとは大きく異なっている。

次に他の出土資料との対比について考えてみたい。まず、いままでの土浦城跡の出土資料との比較であるが、土浦城跡では1985年の本丸・二ノ丸調査、86・87年の櫓門下の調査、88年の東・西櫓等の調査、93・94年の外丸御殿跡の調査時などにかわらけの出土が確認されている。その中でも櫓門下から出土した一群は、今回の調査場所に非常に近いことはもちろんのこと、前記第2章2の年表にも記載した1656（明暦2）年の櫓門の地鎮祭祀に伴うと考えられる点で非常に重要な資料である（註14）。この一群は、体部ロクロ成形や回転糸切り無調整の底部はもちろん、全体的なプロポーションや細部の調整も今回の出土かわらけとは非常に良く似ている。詳しく観察すれば特に直線的な体部や口縁部が丸めでやや肥厚する形状等には、第Ⅴ期層出土かわらけとの共通点が見られる。

次の比較資料としてはつくば市の小田城跡の出土資料がある。小田城跡は鎌倉時代初期に常陸国守